

エッセイ

『イエメン日誌』 第 1 回

林 克好（前駐イエメン共和国日本国大使）

I イエメンへ

悪化するイエメン情勢

新しい任地イエメンの首都サナアに到着したのは2012年の秋も深まる頃だった。すでに治安情勢は悪く、日本国政府は危険度4の国として退避勧告を出していた。サナアの欧米大使館や国際機関で働く外国人は、特に誘拐を警戒して町なかを歩くのを自制していた。一方、イエメンの人々の間には、長期支配を続けた大統領が去り社会が変わるのではないかと期待感があった。

（現在のサナア市内）



2012年11月17日朝、ドバイからのエミレーツ航空機はテーブルマウンテンを思わせる荒涼たる岩棚を左手に見下ろしながらサヌア空港に向けて徐々に高度を下げていった。岩山の斜面にへばりつく村の背後には巨大なテーブル状の岩棚が迫り、崩れた土壁だけが残された住居跡らしきものも見えた。一滴の水もない不毛の地にみえるが、よく目を凝らすと茶褐色の風景の中にこれまた茶褐色の集落がぽつん、ぽつんと紛れ込んでいる。アラビア半島の生命力だろうか。

午前9時、サナア国際空港に到着した。標高2300メートルの空港だ。空気が薄いとの先入観が頭から離れない。機外に出てタラップの最上段から見渡すサナアの空はうっすらと埃をかぶり晴れ渡っていた。アンカラ、イスタンブールで過ごした7年の後に戻ってきたアラブ世界には、懐かしい独特の気だるさが漂っていた。

私がはじめて踏んだ中東の地はカイロ。40年以上も前のことだ。その頃とは中東も変わった。用心深くタラップを降り、空港のターミナルに入ると、以前訪れた時の面影を残していたが、大統領の写真が代わっていた。当然だ。2010年12月にチュニジアでついたアラブ民主化の火は瞬く間にエジプトを飲み込み、イエメンにも飛び火した。それが引き金となり、33年間同国を支配してきたサーレハ大統領は1年前に政権の座を降りていた。

政情不安は治安をさらに悪化させた。空港から市内に向かう車は防弾仕様のトヨタランドクルーザーだった。それを追尾する治安警察のパトカーが「どけどけ」とサイレンをならしめる。通りを歩く人々はうるさくてほんとに迷惑だろうと思ったが、運転手のフェイスルは、そうしないと人々は道を開けないし、スピードを落とすと危険だからという。助手席にはイエメン人の武装警護官が同乗している。追尾してくるパトカーにはイエメン治安警察派遣の兵士4人がAK47（通称カラシニコフ）を手に乗っている。AK47はソ連軍のカラシニコフ氏が考案した世界的ベストセラーの自動小銃。中東でも旧ソ連と関係が深かったイエメンのような国はソ連製の兵器、装備をもっている。2013年に亡くなったカラシニコフ氏はこの銃を考案した功績で将軍にまで昇進した⁽¹⁾。ライセンス生産するチェコ製カラシニコフなどもあるが、イエメンのような貧しい国では廉価な中国製が人気だという。サナアなどイエメン北部では、日本の一般家庭が消火器を置くような感覚で家庭に銃を置いているらしい。この国では武器は簡単に手に入るのだ。

着任して4日後に、アブーバクル・カルビー外務大臣に信任状の写しを提出した。信任状とは、自国の元首から任国の元首に宛てた書状で、日本の場合には天皇陛下の書状だ。大使は着任すると真っ先にこの信任状を相手国政府に渡す。そうすることにより外交活動を開始できる。信任状の写しを提出するのは、元首に拝謁し信任状の原本を手渡すまで時間がかかるためだ。国によっては1年も2年もかかる国がある。通常、数カ国の新任大使が着任したのを見計らって、数カ国まとめて大使の信任状捧呈式が行われる。

噂には聞いていたが、カルビー外務大臣は知的な風貌の、もの静かな、円熟した外務大臣の雰囲気醸し出すジェントルマン大臣だった。後に食事に招いた時に分かったことだが、一時期日本大使館の主治医もしていたという。英国で医学を学び、カナダで医師として働いた後、イエメンに戻った。1980年代にサナア大学で教鞭をとり、その後副学長を務め、そのかわり医師として医療にも従事した。

イエメンに到着して10日後の11月28日にアブドラッポ・マンスール・ハーディ大統領に信任状を提出した。ハーディ大統領は控えめな性格でスタンドプレーのない人に見えた。18年間、副大統領をしていたのだから、サーレハ前大統領との関係がやりにくいのも無理もない。友人のイエメン人ビジネスマンがこんな話をしてくれた。プロジェクトの開所式に大統領の代理でハーディ副大統領が出席した。テーブルカットの段になって友人はハサミを用意するのを忘れたことに気がついた。「あっ！」と思ったが、時すでに遅し……。万事休すと思いきや、副大統領の側近がおもむろにポケットからハサミを取り出し、そっ

とハーディ副大統領に手渡した。テープカットは難なく終わった。友人のビジネスマンはほっと胸をなでおろし、こう思った。「そうか、ハサミを忘れたのは自分が初めてではなかったのだ」「長年、ハーディはサーレハの下でそんな仕事ばかりしてきたのだ。そりゃ、サーレハとの関係をマネージするのは心理的に難しいだろう」。

ハーディ大統領の取ったサーレハ対応策、それはサーレハとの接触をできるだけ避けることだった。

イエメンの歴史

イエメンはアラビア半島南端にあるアラブの最貧国。2013年当時、2,500万人の国民の半数が食糧不足に苦しんでいた。1000万の人々が清潔な水を手に入らず、18歳以下の人口が国民の半数を占め、人口は20年で倍増する勢い（増加率3%）であった。毎年労働市場に加わる何万人もの新卒者が職を得るのは並大抵のことではなかった。その状況を2015年3月に勃発したイエメン戦争がさらに悪化させた。国連の報告によれば、以下のような状況だ。

6年以上に及ぶ戦争の犠牲者は推定23万3000人、そのうち13万1000人が食糧、医療サービス、インフラの欠如など間接的な原因による犠牲者である⁽²⁾。

国民の80%にあたる2400万人が何らかの形で人道支援を必要とし、そのうち食料支援を必要とする人は1350万人で、今年はその数が1600万人になると予測されている⁽³⁾。

8000人以上の死者、96万人以上もの感染症状者を出した2017年のコレラの発生に続き、2020年からは新型コロナウイルスの感染拡大にも襲われており、国連は「世界で最悪の人道危機」と評している。

イエメンは古代王国時代にはシナモンなど香辛料、香料などの交易や交易路として栄え、ギリシャ人やローマ人には「アラビア・フェリックス（幸福のアラビア）」と呼ばれた。イスラム期に入ると、北部および紅海沿岸部にはエジプトのアイユーブ朝やオスマントルコが、南部のアデンにはポルトガル、次いで英国が進出してきた。しかし、これら大国の実質的な支配は沿岸部にとどまり、内陸の北部高原地帯やさらにその先の広大な砂漠地帯にまで及ぶことはほとんどなかった。19世紀に入りオスマン帝国のエジプト総督ムハンマド・アリーがイエメン北部に触手を伸ばしたこともあり、英国はインドへの航路を守るため1839年、アデンを占領した。その後、スエズ運河が開通したことでアデンの戦略的重要性は高まり、英国は1967年までアデンを管理下においた。

イエメンでは20世紀に入るまで北部の高原地帯や紅海沿岸部、あるいは東部のハドラマウトで局地的に部族集団を糾合した支配者は現れても、イエメン全域、あるいは北部ないし南部の全域を支配する指導者は現れなかった。19世紀半ばに英国の支配下に入ったアデン、その背後に広がる南部の部族支配地域、オスマン帝国、エジプト、サウジアラビ

アの進出に直面した北部部族地域は、1980年の南北イエメン統一までそれぞれ独自の歴史を歩んできた。そのことが今もイエメン政治に影を落としている。

さらに、アデンを除く南部の部族支配地域はさらに西部と東部に大別され、英国は西部の諸部族と90以上の協定を結び、2人のスルタンが大きな影響力をもっていた東部部族地域には互いに抗争する2000の集団があるありさまだった⁽⁴⁾。

1918年に第一次世界大戦が終わると、オスマントルコはイエメンから兵を引き、預言者ムハンマドの系譜に連なるイマーム・ヤヒヤがイエメン北部一帯に支配を拡大していった。イマーム制（王制）は1962年の革命で倒れ、イエメン・アラブ共和国（いわゆる北イエメン）が誕生し、新しい時代の幕が開いた。1952年の自由将校団によるエジプト革命がアラブ世界でアラブ民族主義の潮流を生み出していた時代である。そうした時代の流れの中でイエメン南部では反英独立闘争が激しさを増していった。英国のスエズ以東からの撤退をうけて1967年に独立した南イエメン人民共和国（いわゆる南イエメン）はイエメン社会党の一党独裁の下で国の社会主義化を進めた。国名もやがてイエメン民主人民共和国と改称された。イデオログのアブドルファッターハ・イスマイルが党書記長として権勢をふるった70年代末には南イエメンはアラブで唯一の共産主義国家と評された。

イエメンの多くの人々はいつの時代にも空腹で貧しかった。特に干ばつの年は厳しかった。中東では客人をもてなす伝統的な気風が社会の隅々にまで行き渡っていて、一時の客人である私たち外国人にとっては甚だ心地よい。イエメンの人々もとても心が暖かい。しかし、共和制になってからも貧困や、地方を顧みない中央政府の政策、基本的な行政サービスの欠如により一般の人々の生活は一向に改善されず社会的不満が沈殿していた。そうした不満を土壌に1990年代に入るとイエメン南部でイスラム過激派グループ（アル・カーイダ）が根を張りはじめ、イエメン北部のサアダ県ではシーア派のホーシー派によるザイド派復古主義的な社会運動がザイド派の一部の若者たちの心を惹きつけていった。

イエメンの庶民が求めるのは家族の平穏な生活。人々の関心事は、家族の糧を得るための職、医療、子供の教育。親は子供に自分よりはましな生活をさせたいと思うが、そうしたささやかな望みですら、この土地ではなかなか実現が難しい。

「行政の腐敗と混乱、国家の資源と権力の濫用を制御するには徹底的な行政革命を行うことが必須である」・・・1969年、北イエメン大統領のアブドルラハマン・イリヤーニの言葉である⁽⁵⁾。2011年、「アラブの春」の波はイエメンにも押し寄せ、33年間君臨していたアリー・アブダッラー・サーレハ大統領が権力の座から降りた。そして、新しいイエメンのあり方を話し合う国民対話が始まった。そこでは44年前と同じ議論が繰り返されていた・・・腐敗撲滅をどう実現するか。英国人学者ポール・ドレシュによれば、「イリヤーニ大統領の時代には大臣クラスの地位と給与を与えられた者が775人いた。1971年／72年に政府が部族長に給付した手当は約4000万イエメンリヤルで、その年の農業ザカート（喜捨税）総額の3.5倍に及んだ。公務員が急増し、・・・その多くが適

度な腐敗で生きていた。・・・地方では山賊行為と反乱が断続的に起こっていた」⁽⁶⁾。

国民対話が始まった2013年、山賊行為、送電線寸断、石油・ガスパイプラインの破壊が繰り返し起こり、政府に要求が突き付けられる構図は44年前と変わらなかった。

(文末にイエメン史年表を掲載)

注

1：英文ウィキペディアのカラシニコフの項参照

Mikhail Timofeyevich Kalashnikov (10 November 1919 – 23 December 2013) was a Russian lieutenant general, military engineer, writer, and small arms designer.

2：UN OCHA 報告 2020年12月1日

3：国連人道問題事務次長 Mark Lowcock の2021年1月14日国連安保理報告

4：Fred Halliday 1974 & 2000 “Arabia Without Sultans” P155 Saqi Books

5：Paul Dresch 2000 “A History of Modern Yemen” P124 Cambridge University Press

6：前掲 Paul Dresch 2000 “A History of Modern Yemen” P124-125

II 幸福のアラビア

イエメンの土地と人々

ポール・ドレシュは北イエメンの地域的特性を次のように記している⁽¹⁾。

サナアとサナア以北の高地は部族社会で、宗派的にはシーア派の一派であるザイド派イマームが何世紀にもわたり支配してきた。ザイド派はサイイドと呼ばれる人々、すなわち、預言者ムハンマドの娘ファーティマと女婿アリー・ビン・アブターリブの系譜に連なる者が統治の正当性を有すると考える。初代イマームのイマーム・ハーディが896年にサアダで統治を始めて以降、イマームはイエメン北部での支配を維持し、イマームが武人で、信仰心篤く、高潔な人物であるときには勢力圏を広げた。サナアがある高原地帯は、岩山がそそり立つ荒れ地で、土地は痩せこけ、人々はいつの時代にも飢饉の恐怖に怯えながら生きていた。

東側に広がるハドラマウト地域でもサイイドは重要である。この地域のサイイドは952年にイラクから移住したアハマド・イーサーを起源とし、宗派的にはスンナ派で法学派としてはシャーフイー派に属している。シーア派のザイド派と違ってスンナ派シャーフイー派法学派のサイイドは権力を求めなかった。ハドラマウトのサイイドの影響力は地元に限られたもので、もめ事の仲裁や聖廟崇拝を通して確立されていた。

タイズ、イッブといったイエメン中部は北部高原地帯と比べれば自然は湿潤で、人々はシャーフイー派法学派に従っていた。北部からこの地方に移り住んだザイド派はイスラム法学を容易にシャーフイー派に宗派替えした。人々は礼拝の仕方の違いなどにほとんど

囚われなかった。(筆者も多くのイエメン人から、ザイド派もシャーフィイー派も同じモスクで祈っていると聞いた。ザイド派はスンナ派の教義に最も近いシーア派であり、シャーフィイー派はシーア派に最も寛容なスンナ派法学派だといわれていた。)

紅海沿岸のティハーマ地方は、昔から政治に関わらない地域で、人々の誠実さ、親切心、温和さが特徴である。内陸の高原地帯に住む荒々しい部族民もホデイダに出稼ぎに来てティハーマの人々の穏やかさに感激した。

初めての雨

4月から9月までサナアでは清々しい初夏の気候が続く。真夏でも気温は摂氏30度を超えることはなく、乾燥しているので日本の夏より遥かに過ごしやすい。イエメンに着いた11月中旬でも5分間、日向に立っているだけで日差しは洋服の上から刺し込んでくるように痛かった。そして、日暮れとともに底冷えの夜が始まった。一日の中で気候が急変するという鮮烈な体感、アラブ半島に在ることを実感させた。サナアの冬は12月から2月いっぱいの3か月間。日中でも屋内が底冷えし、寒がりには暖房が欠かせなかった。

中東は暑いとイメージされるが、地中海に面する地域は雨も降り、冬は寒い。ヨルダン、レバノン、トルコでは積雪もある。冬のアンカラでは最低気温がマイナス15度、最高気温がマイナス10度という日もあった。アンカラで生まれて初めてスノーブーツを買った。海に面するイスタンブールでも11月～3月には車にスノータイヤをつけた。シリアやイラクでも冬の寒さは厳しい。他方、アラビア半島、特に湾岸地域やインド洋、紅海に面する地域は、夏は気温が50度を越し湿度も非常に高く酷暑だが、10月半ばから3月半ばまでは快適でとても過ごしやすい。

中東と言えば砂の砂漠を連想する日本人が多いが、一般的に砂漠とは荒涼たる土漠が広がる地域であり、穏やかに波打つ砂丘の砂漠はアラビア半島や北アフリカ(エジプト、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ)の特定の地域でしか見られず、都市の近くで簡単に見られるわけではない。

2013年3月20日午後3時、にわかに騒ぎ始めた突風を前触れにそれまでの晴天が見る見る暗雲に包み込まれ、遠くに響く雷鳴に呼応するかのようにその年初めての雨が降り出した。雨脚は次第に強まり30分もすると1センチ角はあろうかと思われる「ひょう」が降りだした。11月半ばにサナアに着いて以降、初めての雨であった。

北部高原地帯の人々は3月の雨を喜ぶ。この雨で柔らかくなった大地を耕しはじめるのだ。イエメンの人々が雨を待ち受ける時期は年に3回。次は6月の雨で、その雨の後に種まきが行われる。さらに、8月の雨は実りを豊かにする。水が乏しいとはいえ、やはりイエメンは農業国なのだ。雨は3時間も激しく降り続いた。数年ぶりの長雨だという。人々は「雨季が来た」と表現した。こんな表現は他のアラブの国では聞いたことがなかった。エチオピアなど東アフリカの高原との近さを感じさせた。

雨は午後から夕方にかけて短時間降る。降り始めてから30分足らずで西日が差してくる。それでも7月、8月の雨の多さには驚かされる。稲妻が鋭く空を切り裂き、雷鳴と共に一気に豪雨が降り注ぐ。雨水はサナアの町の南側の高みから、通りを流水路にして一気に市中心部に流れ込み、さらに低地の町の北側に流れ抜けていく。排水溝がないので道行く人の足元は大洪水だが、恵みの雨なのだ。当時のムジャウワル農業大臣は、町の北側でこの水を捕捉していると言った。この雨が地下水になり生活、農業用水となる。しかし、サナア、タイズなど都市部への人口集中が進み、水不足は深刻な問題になっている。サナアでは、今では900メートル掘り下げないと地下水に到達しないという。タイズ市長は紅海沿岸部での海水淡水化を現実の問題として考え始めていたが、タイズは標高1,400メートル、サナアは2,300メートル。送水に要する費用も考えると、簡単に淡水化が解決方法だともいえない。

砂漠の鉄砲水は悲劇も生む。2013年の夏、ワーディ（涸れ河）を走っていた結婚式の車列が上流から流れ襲った鉄砲水に飲み込まれ、犠牲者を出す痛ましい出来事があった。砂漠での溺死はあり得るのだ。

部族

部族はイエメン内政の重要なファクターであるが、外部の者には極めて分かりにくい。北部高原地帯のサナア、アムラン、マアリブ、サアダ各州の部族の動きが時として政治の動きを左右してきた。サナア生まれのイエメン人に「部族長の役割は何か？」と聞いてみた。「トラブルを作り出すこと」という厄介者扱いの答えが返ってきた。

イエメン北部の山岳部に住む部族は昔から戦士だった。前述のポール・ドゥレシュによると、北部の部族連合を以下の通りである⁽²⁾。

ハーシド部族連合：ウサイマート、イドハル、バニ・スライム、ハーリフ、ハムダーン、サンハーン、ビラード・ルース

バキール部族連合：ハウラーン・サーダ、アール・アンマール、アール・サーリム、アール・アマーリサ、ドゥ・モハンマド、ドゥ・フセイン、バニ・ナウフ、ワイラ、スフヤーン、アルハブ、ムルヒバ、ニフム、イヤール・ヤジード、イヤール・スライヒ、バニ・フシャイシュ、ハウラーン・アル・ティヤール

ミドヒジュ部族連合：ムラード、アンス、アル・ハダー、カイハ

ハーシド部族連合とバキール部族連合はイエメン北部で双璧をなす部族連合で、数ではバキール部族が上回るが、影響力ではハーシド部族はバキール部族を凌いできた。シャイフ・アブダッラー・アハマルは2007年に病死するまで50年近くハーシド部族の長の

地位にあった。父と兄弟がイマーム・ヤヒヤ（1869－1948。1918年以降イエメン北部の王国を率いたイマーム）に処刑され、彼はその跡を継いだため、1962年の共和派革命後、共和派と王制派が争ったイエメン内戦ではエジプトが支援した共和派を支援した。1974年に大統領になったイブラヒム・ハムディが、部族は田舎に引っ込んでろ、とばかりに鉄拳で部族を統制すると、ハーシド部族との関係が険悪化していった。ハムディは3年後に暗殺された。この事件を受けてサウジアラビアが仲裁に入り、政府と部族との間を取りもった際に利用したのがハーシド部族連合の長であったアブダッラー・アハマルだった。アハマルはイエメン内戦では反イマーム派に与しサウジアラビアが支援する王制派と闘ったが、内戦が終結すると、今度は親エジプト政権の打倒に手を貸した。キングメーカーとしてアリー・アブダッラー・サーレハ大統領の擁立を支持し、サーレハ大統領はアハマルを通じ部族の協力を得て権力の基盤を固めていった。両者は微妙な共存関係にあった。アハマルは1990年にはイスラーハ党を設立し党首に納まり、2007年に死去するまで長く国会議長を務めた。彼の死後、長男のサーディクがアハマル家の家長とハーシド部族連合長の座をそれぞれ継いだが、イエメン政治に影響を及ぼしたのは政治的野心を持った4男ハミードであった。シェイク・アハマルには10人の息子たち、サーディク、ヒムヤル（国会副議長）、フセイン、ハミード、カハタン、ミドヒジュ、バキール、ハーシド、ハーシム、カハタンがいた。

「俺と兄弟は組んで従兄弟と戦う。俺と従兄弟は組んでよそ者と戦う」⁽³⁾。部族意識を表す言葉としてイエメンでよく耳にした。部族長は部族全体の安全を守り、利益を確保し、部族内の争いを裁定し、職の斡旋もする。これに対し部族構成員は、部族長を長とする集団の一員として部族長に忠誠を誓う。パトロン（庇護者）と非庇護者の関係が部族の連帯感を強める。イエメンでは中央の統治が地方に及ばなかったため、部族は独自に相互扶助を行い、コミュニティの利益を守ってきた。山岳地帯の部族は孤立した山間に住み、土地や水や収穫を巡って内部で争った。北部の高原に住む部族は家畜の草地を求めて移動した。沿岸部の部族は海の向こうの世界と交流をもち、穏やかで、友好的な性格を特徴とした。不毛な、環境の厳しい土地に住む北部山岳地帯の部族は比較的肥沃な土地に住む南部の部族を襲い収奪した。部族は井戸、道路、診療所などの設置や部族民の政府への雇用を要求して中央政府と対立することもあった。中央政府の部族政策の基本は、手当や利益を供与することにより懐柔し忠誠を獲得するパトロン主義だった。ザイド派イマームによる統治の時代からイエメン北部では各部族の忠誠をつなぎ留めておくことが統治の基本であった。1962年の共和制革命以降も、部族は政治勢力としてイエメン政治で主要な役割を果たしてきた。共和制樹立後8年にわたった続いた王党派と共和派の内戦に介入したエジプトはイエメン撤退までの7年間に7万人を派兵し、2万人以上の犠牲者を出した。その間部族も、王制派、共和派に分かれて戦い、名を成した部族長は政治的、社会的地位を築いていった。イエメンにおいて有力部族の支持を得ることは政権を維持する上で重要であった。現在イエメンで進行中の紛争は政治権力闘争であるが、政治権力を手に入れば経済的利

益も思うままになる。

ザイド派のイマーム体制時代、イマームの警護は部族から名誉ある仕事とは見られていなかった。伝統的にサナア南部のサンハーン部族と西部のハムダーン部族から部族民が徴用され警護兵に任用されていた。そのため共和制への移行により軍が拡大した際、必然的にサンハーン部族、ハムダーン部族が軍の重要部分を占めるようになった。次第に他の部族も子弟を軍に送り込むようになり、軍は部族の教育機関の役割を果たすようになった。アリー・アブダッラー・サーレハ前大統領はサンハーン、彼の前任者のガシュミ元大統領はハムダーン出身の軍人であった。サーレハは大統領就任後、サンハーン部族を重用し、サンハーン派閥を形成していった。サーレハと幼馴染のアリ・ムフシンもその一人で、サーレハと手を握り軍部に絶大な権力基盤を築いていった。部族を仕切ったハーシド部族長のアブダッラー・アハマルはサーレハ以上の実力者であった。早くから商売に手を染めていたハウラーン部族のルワイシャーン家のような例外はあったが、部族は一般的に「商い」を蔑んでいた。しかし、1984年、イエメンで石油・ガスの開発が始まると、北イエメンの開発ブームの波に乗ってシナン・アブルフーム（バキール部族連合に属する部族長で2021年1月にカイロの病院で死亡、サナア郊外に埋葬された）やアハマル一族がビジネスに乗り出していった。

1980年代、イエメンは消費社会に転じていった。工業のないイエメンはあらゆる物資を輸入する必要があった。生活物資の輸入は大きなビジネスであった。そうしたビジネスのライセンスを得るには的確な人脈と代価が必要であった。軍の枢要な指揮官となったサンハーン出身者は軍の必需物資輸入を扱う軍事経済協同組合の要職に就いていった。1982年、サーレハ大統領はGPC（国民会議党）を結成した。各地の地方共同組合をベースにした地方開発評議会に徴税を任せられ一定の独立性を持ち、次第に中央派遣の軍人に統率されていった。利権が絡むポストを与えることにより忠誠心を買っていく家父長的ネットワークの頂点に立つのがサーレハであった。

1980年代、アラブ世界で興隆したイスラム復古主義の波はイエメンにも押し寄せた。それ以前からイエメンにはエジプト留学経験者や、サウジから帰還した出稼ぎ労働者がイスラム復古主義思想を持ち帰っていた。サウジアラビアは、南イエメンの社会主義に対するカウンターバランスとして北イエメンのイスラム復古主義集団「ムスリム同胞団」を支援した。南北統一後、サーレハは多党制を導入し、社会党に対する対抗勢力として部族長アブダッラー・アハマルにイスラム政党であるイスラーハ党を結成させた。社会党はそれをGPCとイスラーハ党の陰謀とみた。イスラーハ党は、アブダッラー・アハマルに代表される部族グループ、アリ・ムフシンに代表される軍人グループ、ムハンマド・ヤドゥーミ、アブドルワッハブ・アル・アーニシ（ヤドゥーミとアーニシはイスラーハ党の現党首と現書記長）等の同胞団グループ、アブドルアジーズ・ジンダーニ等宗教者グループの4つグループから成る寄り合い所帯であった。イデオロギーや宗教的信条により結束した集団ではなく、宗教の仮面をかぶった利益追求集団の色合いが濃かった。少数派ながら元

G P Cのメンバーも含まれていた。サーレハ大統領に頼まれイスラーハ党のメンバーになった者もいた。

前社会党書記長のヤシーン・ノーマン（2015年から駐英大使）はこの寄り合い所帯を軍と部族が結びついた集団とみて、「アスカバリー」（軍人（アスカリー）と部族民（カバリー）を結び付けた造語）と呼んだ。生産が始まった石油ガス産業、その周辺ロジスティックを支える石油関連産業、警備産業は魅力的な権益の源となった。サーレハが作ったパトロン主義の網の目の中で、役人も、軍人も、党人も、それぞれがサーレハから地位をもらい、役職を利用して富を築いていった。部族長はサナアに不動産を買い、邸宅を構え、家族とともに生活の基盤をサナアに移し、地元と疎遠になっていった。90年代には部族長の息子たちが新世代として登場しファミリーの人脈を利用してビジネスに乗り出した。商業・貿易、不動産業がもっぱらで、産業に投資する部族民ビジネスマンはほとんどいなかった。

イエメンの部族については、ある大臣はこう話した。

「イエメンの部族社会の悲劇は、労働を卑しきものとみること、それに部族長は政府からの手当をポケットに入れてしまうことだ。一日500リヤルを1,000人の手下に配ることはしても、学校は作らず、部族民は文盲のままだ。嫌でも部族長に従うしか生活の術がない。商業さえも蔑んでいたが、近年ビジネスがカネになると見るや考えを変え、有力部族の息子たちは競ってビジネスに勤しむようになった。部族には対話の文化はない。あるのは相手を屈服させる文化だ」と。

部族社会の根底をなすのは、部族長が部族民の面倒をみるパトロン主義である。イエメンの部族社会に否定的な見方をする人は、シャーフイー派のみならずザイド派の人も部族長が部族民をみじめな状況に置いておくことにより部族長への依存構造を維持し権威の源としてしていると批判的である。アハマル一族は一大財閥にのし上がったが、出身地のアムラン県ハミール村に学校1つ建てていないといわれた。サーレハ前大統領はパトロン主義に基づくネットワークを政府、軍、党、ビジネス界に築き操縦した。イエメンではどのグループにも属さない者、後ろ盾のない者が一番無力だ。

私はある部族長に次の質問をぶつけてみた。

- ① 部族長は何を最も優先的に守らねばならないか。
- ② 部族社会の基盤を成す価値は何か。
- ③ 部族社会に世代間の対立等変化は起きているか。
- ④ 部族社会の安定要因は何か。
- ⑤ イエメン安定のための部族長の役割は何か。

部族長は概ね以下のように述べた。

イエメンの社会的安定は、部族の力と政府の力のバランスの上に立った共存関係で保た

れる。前提となるのは、政府指導者が誠実であること。強い政府と部族が相互に補完し合いイエメンの安定を保つ。部族が社会と混ざり合うことが部族社会とイエメンの社会全体の安定を導くのだ。部族長の責任は、自らの部族の安全と利益を保護すること。部族長の関心事は、部族民に開発と社会サービスを提供することではなくてはならない。ここ20年ばかり、部族長が都市部に出てきて、そこを生活の基盤にしてしまったため部族長と部族民の関係は弱まっている。そのために、かつては守られていた部族の掟も守られなくなっている。

その部族の掟とは、①町の中で発砲しない、②市場で発砲しない、③婦女子に危害を加えない、④道路は人の移動と物流のために自由通行を守る、というものだ。かつては、高い道徳観があった。

部族長はさらに続けた。

今日、住民の尊敬を集める由緒ある部族長は1割程度になってしまった。部族長のすべてが裕福というわけではない。今、シャイフ（部族長）を名乗る者の9割はカネの力で周りからシャイフと呼ばれるようになった成り上がり部族長。成り上がり部族長は新たなルールで動く。部族の力が弱まり、空白ができたところに宗教が入り込み、過激主義に土壤を提供した。アル・カーイダを庇護する部族も現れた。今ではアル・カーイダを庇護する部族は少なくなったが、ハドラマウト、シャブワには今でも彼らを匿う部族がいる。

過激主義と闘うための武器は、住民（部族民）へのサービスの提供、安定の確保、希望をもたせることである。ホーシー派（1980年代にバドルッディン・ホーシーが始めたザイド派復古主義運動）のメンバーは60%—70%が部族民で、バキール部族連合に属する部族がほとんどである。首都サナアは常に周囲の7部族に守られてきているので、ホーシー派はサナアに攻め込めない。（しかし、部族長のこの予測ははずれた。これら7部族がホーシー派のサナア包囲を黙認したためサナアはホーシー派に占領された。このことは、言い換えれば、ハーディ大統領やアリ・ムフシン将軍はこれら7部族の支持を失っていたということだ。7部族とは、バニ・マタル、ハムダーン、サンハーン、ハウラーン、ニフム、アルハブ、バニ・フシャイシュ）。

さらに部族長はこう続けた。

これまでイエメンでは強い部族の存在が独裁者の登場を阻んできた。アリー・アブダッラー・サーレハは「カネ」の力で独裁者になることにある程度成功したが、結局、ニフム、ハウラーンなどの部族がサーレハから離反して、彼の長男アハマド・サーレハが率いる共和国防衛隊と戦った。部族の価値は、埃をかぶった黄金のようなものだ。埃を払えば燦然と輝く。一族の利益を侵害するような事態が起これば、部族の有力者が集まって協議する。部族が住む地域の利益を守るために結束する。2011年に蜂起した若者の中には部族民も多くいた。それは変化を求める声だった。部族民は食べ物がないと静かに死んでいく。決して物乞いしない。部族長も貧しすぎて、そうした部族民が餓死するのを助けられない。

バキール部族連合に属する別の部族長が話してくれたところによると、部族長にもレベ

ルがある。地域全体を守る部族長、その下に、特定の地区を守る部族長がいる。さらにその下に、より小さな単位である村を守る部族長がいる。部族長（シャイフ）といってもどのレベルの部族長であるかによって重要度が違ってくる。部族社会に住まない町の住人は、北部出身者であっても、人の名前を聞いただけでは、その人がどの部族に属すのか見当がつかないという。部族長は、ハーシド部族連合はバキール部族連合とは別の部族構成をもっていると述べ、バキールに比べて歴史が浅いと少しライバル意識が感じられるトーンで話した。

（イエメンの男性の伝統的な民族衣装）



部族の仲裁

2013年5月、有力部族長の車列に一台の車が割り込んだ。割り込んだ車が部族長の車列から発砲を受けて若者2人が射殺された。翌日の新聞は、部族長は被害者のそれぞれの家族に車1台と百万リヤル（当時50万円）の賠償金を提示したが、家族側は拒否したと報じた。これが血の示談金（blood money）の相場かと興味深かった。

2013年7月29日のイエメン・タイムズは部族の仲裁に関する記事を掲載した。その記事の内容は概ねこうだ。

2013年5月、ハッジャ県のある部族長が腰のジャンビアに手を掛けて国営電力公社の一人の社員を脅した。これに怒った電力公社の社員たちが一週間ハッジャ県全体を停電させた。事の発端となった部族長は牡牛一頭を電力公社の前に捧げ、それで電気の供給が再開された。牡牛は謝罪のため置かれもので、これは司法当局を通さず争いを収める一つの例を示していた。2012年に起こった部族間の争いの9割が部族の仲裁で解決されたとの統計がある。部族に属するイエメン人にはこの仲介手続きはルーティーンだが、部外者には複雑で誤解することもある。サヌア大学社会学部フアード・アル・サラヒ教授によれば、裁判に訴えると官僚主義のために時間ばかりかかり、その間に報復の連鎖が始まってしまう恐れがあるため、多くの人がその前に争いを解決しようと部族長に仲裁を頼む。地方の部族長はうまく仲裁することにより尊敬を勝ち取る。殺人事件の場合、交渉は即座

に始まる。罪を犯した者の部族は、被害者側の部族のもとに複数の代表者を送り交渉の時間と場所を決定する。通常は2つの部族の間の中間地点が会談場所となる。会談が拒否された場合には、部族長たちは仲介が失敗したとの明確なメッセージを出し、部族は復讐を誓い、復讐はまた別の殺人を招く。

交渉がまとまると、罪を犯した者は武器と牡牛をもって交渉場所に到着する。敬意と善意の徴として武器を置き、裁定に従う姿勢を示す。「ザーメル：ZAMEL」という詠唱をとなえる。この詩的な捧げ物は過ちに対する謝罪を示すものであり、手続きとして非常に重要である。殺害した側の部族は相手側に裁定を求めるザーメルを詠唱し、殺害された側の部族は同様のザーメルで答える。ここで部族長の一団（殺人の場合は2人以上の部族長になる）は裁定を発表する。許しと被害者の家族への賠償（殺人の場合は「血の示談金：ブラッド・マネー」、軽い犯罪の場合には牡牛の捧げ物）などが内容となる。牡牛は屠るために提供されるが、殺人事件の場合には普通その程度では済まされない。殺人事件の賠償金は、ジャウフ県の部族の場合には被害者一人あたり5百万リヤル（250万円）、マアリブ県の部族の場合には被害者一人あたり4,400万リヤル（2,200万円）と、部族によって異なる。被害者の家族が部族長の裁定を受け容れれば、合意事項は速やかに実行されなければならない。遅延は「恥」とみなされる。勿論、部族は仲裁団の裁定を拒否することもできる。

土地や水をめぐる争いでも部族長の仲裁がなされる。争う両者が高価な品物、通常は武器、を贈呈し仲裁が始まる。この行為は部族長の裁定に従うことを意味する。裁定が終われば贈り物は元の持ち主に返還される。裁定にあたって目撃者の証言も行われる。部族長の裁定の拠り所となるのはイスラム法（シャリーア）である。若い世代は、こうした部族長の裁定は法の支配の原則に基づく国家の建設を損ねるものとして批判的である。イエメン人が地方の指導者の仲裁に頼る限り国家組織は強くならない、と若い世代は考える。

2013年12月17日付の「イエメン・タイムズ」紙によると、12月12日、バイダ県で花婿一行が車列を組んで花嫁の家に向かっていたところ、突如ドローン（無人機）攻撃に遭い、少なくとも12人が死亡、8人が負傷した。14日、アル・ダーヒリ・アッシャダーディ・バイダ県知事と政府軍のアリー・モホセン・ムサンナー第7軍管区司令官がラダーアに赴き、「部族の裁定」に従いライフル（カラシニコフ）100丁と34百万リヤル（約1700万円）を支払い、事態を収めたと報道は伝えた。（当時、筆者は政府軍が無人機攻撃の能力を有すると聞いたことはなく、恐らくアル・カーイダを狙った米軍の誤爆を政府軍が代わって謝罪したものと推測した。）

2014年2月2日付の「アル・ヤマン・アル・ヨウム」紙は、ハドラマウト県の有力部族長サアド・ビン・ハブリーシュが路上に設置された軍の検問所を無視して通過しようとし、護衛2人と共に殺された事件（2013年12月2日にセイユーンの町の入口の検問所で発生）に関連して、政府とハドラマウトの部族連合の間で次のような和解が成立したと報じた。ハーディ大統領に部族連合との交渉を託されたのはアリ・モハンマド・アル・

ヤジーディ地方行政大臣で、最後に合意案を被害者の一族であるオマル・ビン・ハブリーシュに飲ませたのは部族の仲介だった。同紙は、仲介のための合意案は以下のようなものだと報じた。

- 1 10億リヤル（約5億円）の補償金（部族連合の要求額は20億リヤルだった）
- 2 車（ランドクルーザーとシャス＜注：トヨタの荷台付き4輪駆動車＞）20台（部族連合の要求は200台だった）
- 3 銃202丁（部族連合の要求は1,000丁）
- 4 ハド라마ウト県内の軍・治安駐屯地を部族に引き渡し、石油会社の警護を部族に委託
- 5 政府軍のハド라마ウト県外への移動
- 6 部族民4,000人の国防省、内務省への採用

この件に関してはその後、本件合意の再交渉があったのか、2014年3月7日付のインタネット・ニュース「マアレブ・プレス」は、21億5千万リヤル（約10億7500万円）、2013年型白色のサロン車20台、カラシニコフ200丁、政府に拘束されている部族民の解放という条件で合意したと報じた。車の色まで指定しているところが面白い。交渉団長のヤジーディ地方行政大臣に加え、ダイニー・ハド라마ウト県知事、ムカッラ県局長、マシーラ石油会社警護部隊長ハーレド・ビン・ターレブ少将、バー・アッバード宗教指導者、ジャウヒ族長が加わったと報じられた。

2014年1月11日付の「サウラ紙」は、バイダ県で40年間続いたガサン・ダハブリー家とサイード家の間の部族抗争が、ターリク・サーレハ・ムーサ・アル・アザーニー部族長の仲介により和解合意に達し、終結したと報じた。和解内容は不詳だが、40年間、復讐に次ぐ復讐で多くの犠牲者を出した争いが終息したと報道は伝えた。

ハド라마ウトとハドラミー

イエメン東部、東はオマーン、北はサウジアラビアのルブウルハーリー砂漠、南はアラビア海と接する地域がハド라마ウトと呼ばれる。タリム、シバーム、セイユーンといった古い町が存在する。この地域の人々はアラビア語でハドラミー（ハド라마ウトの人という意味）と呼ばれる。宗派的にはシャーフイーに属する。19世紀に英国の保護領となり、クアイティ(Qu'aiti)、カティーリー(Kathiri)の両スルタンがその地域の支配を争った。

荒涼たる溪谷に囲まれたその地から多くの人々がマレー半島やインドネシアの島々、南インド、東アフリカ沿岸部に旅立ち、インド、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ジブチ、ケニア、タンザニアなどにハドラミーのコミュニティが作られていった

新天地で成功した人々は子弟をカイロやメッカに留学させ、イスラムの教養を身につけさせた。そうした留学組は本場仕込みのイスラムの知識やアラビア語を習得して帰国すると周囲から一目おかれた。アラブ留学やメッカ巡礼の帰途に祖先の故郷ハド라마ウトに足をのばす者もいた。東南アジアに移り住んだハド라마ウト出身者は現地社会に同化していった。今、シンガポールやインドネシアに住むイエメン系の国民は全くアラビア語が話せないのが普通だ。

スマトラ島のパレンバンで貿易商として財を成したムハンマド・アル・ジュナイドがシンガポールでビジネスを立ち上げたのは、スタンフォード・ラッフルズがシンガポールの町づくりを始めた1819年だった。インドネシア、マレー半島で貿易商として成功したアブドルラハマン・サッカーフがシンガポールに移ってきたのは1848年。数年後の1852年にハド라마ウトからサイイド・シェイフ・アル・カーフが移住してきた。アル・カーフ氏は貿易業と不動産業で財を成した。20世紀半ばにはハド라마ウト出身のアル・ジュナイド、アル・サッカーフ、アル・カーフのイエメン系3ファミリーがシンガポールの大半の土地を所有していたという。1918年に建てられたアル・カーフ・マンションは当時の名残のひとつ。1887年オープンのラッフルズホテルはアル・サッカーフ一族が所有していた⁽⁴⁾。

ハド라마ウトと東南アジアの関係は14世紀に遡り、19世紀にオランダ領の東インド地域やシンガポールでハド라마ウトからの移民が急増した⁽⁵⁾。20世紀になる頃には30万人のハドラミーのコミュニティがあり、インドネシアでは貿易に従事し、シンガポールでは不動産を所有していた⁽⁶⁾。ハド라마ウトからアラビア海沿岸部に出るのですらラクダで一週間近くかかる道のりだった。その頃、風に頼るダウ船に加えて蒸気船も登場していたが、アジアに向かう蒸気船が出る港町アデンまでさらに陸路で数日を要した。ハド라마ウトは、茶褐色の岩山や砂漠が広がり、緑は深く切り裂かれた溪谷に点在するだけという過酷な地である。そこから多くの人々が東南アジアやアフリカ東海岸に向けて、一族の者や友人を頼って旅立った。1930年代半ばのハド라마ウトの人口は26万人、そのうち9万人が海外在住経験者だったと英領アデンの行政官ハロルド・イングラムは記している。生活環境の厳しいハド라마ウトに住む人々にとって海外に移住した親族からの送金は貴重な収入源だった。1942年、日本軍がシンガポールを占領したことによりハド라마ウトへの送金が途絶えた。ハド라마ウトでは運悪く旱魃の年が続き何千人もの餓死者が出た⁽⁷⁾。

アル・カーフ・グループの創始者の息子としてシンガポールに生まれたアブーバクル・アル・カーフは父の故郷のハド라마ウトに戻り、私財を投じて道路の建設など地域の生活環境の改善に力を注いだ。部族間の抗争にも終止符を打とうと努力した。アデンの英国政府の目をハド라마ウトに向けさせたのも彼の功績だった。1954年4月、エリザベス女王2世がアデンを訪問した際、アブバクル・アル・カーフはナイトの称号を与えられた。2014年にイエメンの石油大臣を務めたフセイン・ラシード・アル・カーフの祖父にあたる人だ。

サウジアラビアの紅海に面する港町ジェッダに移住し、サウジアラビアの近代化とともに財を成したハドラマウト出身のファミリー財閥には、ビン・ラーデン、ブクシャーン、アムーディ、エサーイーなどがある。サウジアラビアでハドラマウト出身者が成功したのはこの50年ほどだが、インドネシア、シンガポール、マレーシアに経済的足場を築いたのは何世紀も前に遡る。インドネシアにはイエメン系インドネシア人が900万人いる。2012年末にはイエメンに約900人のインドネシア人留学生在がいた。そのうち800人がハドラマウトのタリムにある宗教学校「ダール・アル・ムスタファ」で学んでいた。残りの100人は、サアダ県ダンマージュにあるワッハーブ派神学校「ダール・ハディース」で学んでいた。2013年夏に始まったホーシー派のダール・ハディース攻撃に抵抗してインドネシア人学生も他の留學生にまじって殉教覚悟で戦った。最終的には2014年1月の停戦合意で、インドネシア人学生を含む約2万人の神学生とその家族は「ダール・ハディース」を後にした。停戦合意ではホデイダ県に拠点を移すことになっていたが、ホデイダ県の住民が受け入れに反対したためサナア郊外の谷あい避難生活を送ることになった。

ある時、私はドバイからサナアへのフライトでハドラマウトにルーツを持つインドネシア人と席が隣どうしになった。インドネシアにはイエメンにルーツをもつ人が900万人いてアッタース元外務大臣もその一人だそうですねと言うと、隣の人物は、自分はアッタース大臣の後任だったと言ってポケットから名刺を取り出した。「・・・大統領中東特使」と書いてあった。イエメン系インドネシア人と実際に会えるのは初めてだった。特使の父親は彼をカイロのアズハル大学に留学させた。その後、米国の大学で教育行政の修士号と博士号を取った。インドネシアにはモダニストのイスラム団体「ムハンマディーヤ」と、それに対抗する形で1926年に設立された伝統主義のイスラム団体「ナハダトル・ウラマー」があり、両者ともに反ワッハーブ主義を特徴とする。ワッハーブ主義を国是とする資金力豊かなサウジアラビアの活動はすさまじく、インドネシア人学生をリクルートしてサアダ県のワッハーブ派宗教学校に送り込んでいた。インドネシア当局はイエメン政府の協力を得てこれら学生の動きに注意を払っていた。「ナハダトル・ウラマー」はワッハーブ主義の浸透に対抗するために多くの留學生をハドラマウトのダール・ムスタファ宗教学校に留学させていた。

ハドラマウト系のインドネシア人はインドネシアに根づいて何世代も経っているので望郷の念は全くないという。しかし、祖先の出身地であるイエメンには心情的つながりは感じ、機会があれば祖先がいた地を見たいと思う人が多いらしい。特使は教育の普及（権力の乱用をやめ、国家にとっての利益を考えるようになる）と汚職撲滅（国民は見ている）が国を発展に導く2つの要素だと述べ、中東で将来に期待がもてる国としてイランとチュニジアをあげた。国家は強力な時代には寛容さを示すが、弱体化すると非寛容になる、と国力と寛容さの相関関係を語っていた。

ハドラーの大臣

あるイエメンの大臣は祖先がハドラー出身だった。その大臣の元にセメント工場や鉄工場から電力が安定的に供給されないとの苦情が届く。そこで、その大臣は石油大臣（サーレハ前大統領が党首の国民会議党所属だった）に、一体イエメンには天然ガスがどれくらい埋蔵されているのかと何度も質問したが、何の返答も得られなかったと嘆いた。自らも一員である移行期の内閣を挙国一致内閣（フクマ・アル・ウィファーク）ではなく、偽善内閣（フクマ・アル・ニファーク）だと揶揄した。国内政治勢力の均衡の上に立つ内閣では、各大臣は所属政党の意向に縛られ党の利益の代弁者となり、他党出身の大臣には協力しなかった一例である。

嘆く大臣は熱く語った。送電線が部族の破壊工作で寸断されると、電力大臣や内務大臣は、「絶対に許さん、目に物を見せてやる」と大見得を切る。しかし、テーブルの下では部族に袖の下を払ってなだめている。こんな偽善に満ちた状況だ。北部の連中が国の財産を食いつぶしている状況は昔と全く変わっていない。そんな無責任な連中の利益を代弁する者と対話して、彼らの発言の何を信じろというのか。

嘆き大臣の言葉は、国民対話（後述）に参加する南部出身者が北部出身者を見る視点を代弁していた。今は一つの国を構成するとはいえ、異なる歴史を歩み、文化的背景も異なり、南北内戦（南北イエメン統一から4年後の1994年に発生した南部と北部の軍事衝突のこと。北部の勝利に終わった）の結果、敗者が勝者に搾取される時代を経験した南部の人々と勝者の北部の人々との間の心理的ギャップは大きい。嘆く大臣の祖先は19世紀半ば（1860年）にハドラーからインドネシアにわたり、20世紀初めにシンガポールに落ち着いた。大臣はインドネシアとシンガポールで教育を受け、大学はエジプトのアイン・シャムス大学で医学を学んだ。アラビア語、英語、インドネシア語ができた。1997年に与党GPC（国民会議党）に乞われてイエメン政界に身を置くようになった。2007年から2年間、汚職撲滅委員会の初代委員長を務めた。2011年の政変後、大臣として呼び戻された。家族はシンガポールに置いたままの単身赴任だった。国内に政治的しがらみがなく、いつでもシンガポールに戻れる環境にあることから齒に衣を着せずにものを言った。国民は大臣に対し清廉な政治家のイメージをもっていた。かつてイエメン東部ハドラーの地を支配していたスルタン・カティーリーの家系だ。東南アジアには大臣と同じ姓を名乗るものが何万人もいるという。

アントニン・ベス(Sir Antonin Besse)

アントニン・ベスの名前を教えてくれたのは、イエメンの人々に深く尊敬されていた政治家、アブドルカリーム・イリヤーニ元首相だった。

1977年に当時の南イエメンの首都アデンに開設された日本国大使館はスティーマ

ー・ポイント地区にあるクレセント・ホテルの18号室にあった。スティーマー・ポイントとは船舶が7つの海を駆け巡っていた時代、アデンが英国統治下の自由貿易港として最も輝いていた時代に栄えた地区だった。イエメンの人はその地区をタワーヒーと呼ぶ。アデンはインドに向けての長い航海に備えて石炭、水、食料等を積み込む重要な補給地であった。

クレセント・ホテルは1932年にオープンした植民地様式のホテルで、英国時代はアデンの英国人社会の社交場だった。ホテルを建てたのはハドラマウト出身の実業家アブドルカリーム・バザラアだった。このホテルをアントニン・ベスは1937年に購入し、その後ベス商会(Besse & Co.)のオフィスとして別棟（アネックス）を増築した。1954年にはエリザベス女王もこのホテルに宿泊した。

ベスは1877年にフランスのカルカッソヌに生まれた仏系英国人。22歳の時にアデンのバーディ社（Bardey）に就職した。ここでコーヒーの取引など商いをみっちり学んだ。1日13時間働く働き者だった。その後独立してホデイダでビジネスを始めた。これには失敗したが、1914年、アデンに設立した貿易会社のコーヒー・ビジネスが折からの第一次世界大戦勃発で大当たりし、莫大な富を築いた。ベス商会はその後、貿易のみならず、石炭、ココナツオイル、グリセリンなどの製造や、ダウ船建造所、浮ドック、クレセント・ホテル、アラビア航空の経営へとビジネスを多角化していった。その一方で、外国の保険会社、航空会社、船舶会社、ロイヤルダッチシェルの代理店をつとめた。しかし、英国のスエズ以東からの撤退政策、それに続く南イエメン独立（1967年）と国有化政策によりベス商会の活動も幕を閉じざるをえなくなった。ベスは1951年に他界した。大英帝国最後の時代を生きた人物だった。大物ビジネスマンとしてのベスは数々の慈善事業を行った。その一つが1950年にベスの寄贈で設立されたオックスフォード大学セント・アントニー・カレッジである。彼の名前は、こうした形で後世に残っている。

アントニン・ベスとクレセント・ホテルの関係を教えてくれたイリヤーニ元首相に、天皇皇后両陛下（イリヤーニ氏との会話の時点）が1960年に皇太子同妃両殿下としてテヘランからアジスアベバへの途次アデンに立ち寄られ、一泊されたことを話した。「クレセント・ホテルにご宿泊された。そうだろう？」とイリヤーニ元首相は間髪入れずに私の目を覗き込んだ。「はい」と言いたかったが、残念ながらそうではなかった。当時の英国総督の公邸にお泊りになったと伝えた。「ああ、あの丘の上のね・・・」と、ちょっとがっかりした様子だった。それでも私は歴史好きのイリヤーニ元首相にささやかな知識を提供できたのがうれしかった。

その年（2013年）79歳になるイリヤーニ元首相はイエール大学で遺伝子学の博士号を取り、イエメンの首相や外務大臣を何度も務め、誰からも尊敬される人物だった。イリヤーニ元首相は、人生最後の大仕事として、国民対話を通して自由で民主的なイエメン社会を建設しようと取り組んでいた。彼の功績は、一族の者に教育の大切さを教え、男女を問わず学問を身に着けることを奨励したことだ。そしてそれが周りの人々を感化し、イ

イエメンの人たちは、教育が人生の道を切り開くと意識するようになった。イエメンではイリヤーニ姓は知識人の代名詞だった。政府、司法、学問の分野でイリヤーニ一族が活躍していた。多くのイエメン人がイリヤーニ・ファミリーになった。

イエメンの賢人アブドルカリーム・イリヤーニ

アブドルカリーム・イリヤーニはイップ県イリヤーニ村のカーディ（イスラム法の専門家で判事）の家に生まれた。カーディはイエメンではサイイド（預言者ムハンマドの家系の者）と共に尊敬されていた。1970年に国家企画庁を立ち上げ、イエメンに近代国家としての形を与えた。外務大臣、首相などを歴任し、サーレハ大統領に物を言える数少ない人の一人だった。多くの政治家にとってのメンターだった。2012年末に初めて会ったときは好々爺の風貌だった。当時の天皇陛下と同年だと知って喜んだ。高齢なので政府のポストからは身を引いていたが、脆弱な移行期の政治プロセスを歩んでいたイエメンの将来には不可欠な存在だと誰もが思っていた。国民対話の議長はハーディ大統領だったが、イリヤーニは副議長として実質的なとりまとめ役を務め、同氏の知恵と人望が数々の難局を救った。

10か月続いた国民対話は2014年1月25日に成果文書を採択して閉幕した。イエメンの安定化への希望が見えたかに思えた。しかし、イリヤーニは人生最後の大仕事を成し遂げることができなかった。国民対話を終了させることはできたが、大統領選挙と総選挙の実施の前提となる憲法草案が完成される前にホーシー派がハーディ政権を事実上転覆し、民主化プロセスを頓挫させてしまった。2015年1月、イリヤーニは政界引退を表明した。同年6月、イエメンからリヤドに逃れた正統政府とイエメンを事実上支配する反政府勢力（ホーシー派＋サーレハ前大統領派）との間で和平協議が始まった。米、英等は反政府勢力陣営のサーレハ前大統領とホーシー派の切り離し工作を密かに始めた。イリヤーニの役回りはサーレハ説得であった。サーレハはイエメンを離れ国外に出ることを一度は受け入れたが、最後の土壇場で翻意したといわれる。あるいは、最初からそのつもりだったのかもしれないが、その直後の同年9月、イリヤーニは脳梗塞で倒れ、独での療養の甲斐もなく2ヶ月後に永眠した。イエメンの人々は、立場の違うさまざまな政治勢力を説得し和平を実現する上でかけがえのない人物を失った。

イリヤーニ氏はイエメン政治の大御所だったが、大使館の同僚は、物を頼むと一番こまめに動いてくれる人と言っていた。それを身をもって体験したことがあった。2013年3月20日、歴史的な国民対話開会式前日の午後になっても日本には招待状が届かなかった。2011年の政情混乱の悪化を食い止めたG10メンバー（米、英、仏、独、露、中、サウジ、UAE、クウェート、オマーン、カタール、EU、GCC事務局）と、それにオランダとトルコしか招かれていないことが分かった。新しいイエメンを目指して対話が始まる式典に日本が招かれないのはイエメンの利益にならないと思った。日本は長年イエメ

ンを支援してきたからだ。この状況から救ってくれたのがイリヤーニ氏だった。電話で事情を説明すると、「日本が招かれていない？それはおかしい」と即座に言って、すぐに動いてくれた。しかも、途中経過の報告まで入れてくれた。アハマド・ビン・ムバーラク国民対話事務局長（2020年12月、駐米大使から外務大臣に就任）からも連絡が入った。大統領府や国民対話事務局長、筋書きを書いていた国連事務総長イエメン特使の頭から日本が抜け落ちていたのだ。招待状はその日の夜8時半になって日本大使館に届いた。

（4月号に続く）

注

II 幸福のアラビア

- 1：前掲 Paul Dresch 2000 “A History of Modern Yemen” P15
- 2：前掲 Paul Dresch 2000 “A History of Modern Yemen” P215
- 3：「アナー・ワ・アヒー・ディッダ・イブン・アンミー。アナー・ワ・イブン・アンミー・「ディッダ・アル・ガリーブ」
- 4：The Straits Times July14, 2009 “Who built Ruffles Hotel” by Jamie Ee Wen Wei
- 5：前掲 Paul Dresch 2000 “A History of Modern Yemen” P15
- 6：前掲 Fred Halliday 1974&2000 P167
- 7：前掲 Paul Dresch 2000 “A History of Modern Yemen” P59、前掲 Fred Halliday 1974&2000 P168

イエメン史年表

紀元前11世紀頃	南アラビアに幾つかの王国出現
紀元前940年頃	マアリブ・ダム建設される
紀元前8世紀頃	サバア王国、マアリブを中心に栄える。交易ルートに拠点。
紀元前1世紀	ヒムヤル王国がサバア王国を征服
紀元前25年	ローマのエジプト総督、イエメンに遠征軍派遣、敗退。
531年	エチオピアのアクスム王国の侵入
570年頃	ササン朝ペルシャの支配下に入る
630年頃	預言者ムハンマド、従弟アリーをイエメンに派遣。イスラム化始まる
831年	ザイド派イマーム（ヤヒヤ・イブン・アルフセイン）、部族紛争仲裁のた

	めに招かれ、メディナからサアダに到着
896年	ハーディ・イラルハックがイエメン北部でザイド派イマームの統治を始める
11～16世紀	紅海沿岸部、内陸部などを諸王朝が支配。12～13世紀にはエジプトのアイユーブ朝の支配下に。
1513年	ポルトガル、アデン占領（～1548）
1517年	オスマン帝国、エジプト占領。
1583年	オスマン帝国、サナア、サアダ、ナジュラン占領
1634年	オスマン帝国、イエメンから撤退
17世紀	イエメン・コーヒーの輸出始まる
1833年	エジプト総督、紅海沿岸部を奪取
1839年	英国、アデン占領
1849年	オスマン帝国、紅海沿岸部を支配
1869年	スエズ運河開通
1872年	オスマン帝国、サナア占領
1904年	ヤヒヤ・ムハンマド・ハミーディディンがザイド派イマームに。対トルコ闘争を率いる。
1905年	英国とトルコが南北境界線画定協定。イマーム・ヤヒヤは協定認めず。
1911年	イマーム・ヤヒヤ、オスマン帝国と協定締結。北部のザイド派地域の指導者と認められる。トルコは中南部のシャーフイー派地域を支配。
1918年	第一次世界大戦終了、オスマン帝国、イエメンから撤退。イエメン王国
1934年	イエメン・英国サナア条約締結。相互の行政境界線に合意。40年停戦。サウジ・イエメン戦争後、タイフ条約で相互の領域を決める。20年停戦。
1948年	イマーム・ヤヒヤ暗殺。ヤヒヤの息子のアハマドがイマームに。
1952年	エジプト革命
1962年	イマーム・アハマド暗殺。息子のバドルがイマームに。 9月26日革命。王政派と共和派の間で内戦に。サウジ、英、ヨルダンが王政派を、エジプトが共和派を支援。
1963年	10月14日、南部ラドファンで反英独立闘争開始
1966年	英国、1968年末までにアデン撤退の意図表明
1967年	6月7日、第三次中東戦争始まる。エジプト大打撃 11月30日、英国アデン撤退。南イエメン独立
1970年	エジプトのナセル大統領死去 イエメン王政派と共和派が和解。イエメン内戦終結。
1972年	南北イエメン軍事衝突

1973年	第一次石油ショック。原油価格の高騰始まる。
1974年	出稼ぎ労働者送金急増 6月、ハムディ北イエメン大統領就任
1977年	ハムディ北イエメン大統領暗殺。ガシュミー大統領就任
1978	6月、ガシュミ北イエメン大統領暗殺。アリー・アブダッラー・サーレハ大統領に就任。 6月、ルバイア・アリー南イエメン大統領権力闘争で殺害される。アブドルファッターハ・イスマイル党書記長実権握る
1979年	2月、イラン革命。第二次石油ショック 南北イエメン軍事衝突 11月、メッカ事件 12月、ソ連のアフガン侵攻
1980年	南イエメンのイスマイル党書記長モスクワに亡命。アリー・ナセル・ムハンマド大統領が後継者に1982年 北イエメンで GPC（国民会議党）結成。
1984年	北イエメンで石油発見
1986年	南イエメン内戦。敗れたムハンマド南イエメン大統領、北に逃れる
1990年	5月22日、南北イエメン統一 8月2日、イラク、クウェート侵攻。安保理非常任理事国のイエメンはイラク寄りの姿勢取り、サウジからイエメン人労働者追放される
1993年	総選挙で GPC 勝利
1994年	5～7月、内戦、北部と南部が軍事衝突。北部が勝利
1999年	直接選挙でサーレハ大統領に
2000年	サウジ・イエメン国境画定条約締結 11月、アデン沖で米軍艦船コール号爆破され、兵士17人死亡
2001年	9. 11テロ事件。アフガニスタンのタリバン政権崩壊
2003年	イラク戦争
2004年	サアダ戦争始まる。2011年まで断続的に6度にわたり政府軍とホーシー派が戦闘を繰り返す。
2006年	サーレハ大統領再選
2009年	天然ガス生産開始
2011年	1月 チュニジア、エジプトで民衆抗議運動「アラブの春」 イエメンでも民衆抗議運動始まる 3月、サナア市内で抗議デモ参加者50人以上殺害される 11月、サーレハ大統領退陣
2012年	大統領選挙でアブドルラッポ・マンスール・ハーディ暫定大統領に

2013年	3月、国民対話開始
2014年	1月、国民対話終了
	9月、ホーシー派がサナア制圧。政治勢力間で「平和とパートナーシップ合意」
	10月、ホーシー派が中部、南部に支配地域拡大
2015年	1月、ホーシー派がハーディ大統領、首相、閣僚等を軟禁
	2月、ホーシー派が議会停止、大統領評議会設置などを含む憲法宣言 ハーディ大統領、サナアでの軟禁逃れアデンに逃亡
	3月、ホーシー派、アデン攻撃 サウジ等同盟軍が軍事介入。ハーディ大統領はリヤドへ
	7月、アデンの反ホーシー派勢力、UAEの支援得てアデン奪還
	6月、ジュネーブ和平協議
	12月、スイスのビールで和平協議
2016年	1月、サウジ、イランと外交関係断絶
	4月、クウェート和平協議（合意に至らず8月終了）
2017年	2月、アデンでハーディ大統領派勢力とUAE支援勢力が衝突
	12月、サーレハ大統領がホーシー派に殺害される
	5月、UAE支援の南部分離派が南部移行評議会（STC）設立
2018年	1月、アデンでSTC勢力とハーディ大統領派が衝突。
	12月、スウェーデン協議
2019年	8月、アデンでSTC勢力とハーディ大統領派勢力が衝突。
	11月、ハーディ大統領派とUAE支援勢力がリヤド合意
2020年	12月、リヤド合意に基づき大統領派、STC派を含む新内閣成立。 政府閣僚がアデンに移動。